

望月 苑巳

もちづき そのみ 詩人 1947.10.15 東京都荒川区日暮里に生まれる。掲載作は、平成十六年(2004)六月「電子文藝館」のために付記の通り詩誌「孔雀船」初出詩を詩人が自選し、総題は編集室が便宜に付けた。

雪月花

定家卿の思想 あかざりしかすみの衣たちこめて袖のなかなる花のおもかげ

紅千鳥の枝をゆすって、小弛(おだや)む風の、実をもぎとると明るい午後をめざます斎宮女御の淡い声。春の息をかきわけて庭の水鏡がざわめく。

治承四年二月五日、十九歳。

「明月記」最初のページに墨がとじこめられた。

三稜草(みくりくさ)の御簾(みす)のかげで、文(ふ)がらをしたためたとも、また盧生の夢、邯鄲(かんとん)のまくらをうつつきいだいたともきいた。あれから四季の顔色を、短冊にうつしとるわざをおぼえたのか。にじりよる焚香は、虚栄そっくりな媚をくゆらして死ぬ。

御子左家(みこひだりけ)は家系を吊った。

なだれおちる心の人に。

水の入り口からどろりと落ちて。その夏はしわぶきをあげる。かげろうを翳らせて、慣用句はすてる。心のうわずみをすくうと、言葉は倦怠になる。蛍の里で、怨誼をきらびやかにまとわせて、定家卿(ていかきょう)は豪華な悲しみを知ったのだ。陥没してゆく陽の先をさらにぼかし、綺語の思想たちこめ。

あすは後鳥羽院を傍点にするか。

せまい夜を白羊宮のむこうに置く。そらにともるすばるの斑をおしのけて、女御らは袖を見事にあやつる。脈絡を失った歴史の上で、官位は遠近法だ。

おしげもなくもみじをむしって苦屋(とまや)を出る定家卿の胸に、たちさわぐ波がにあう。

母はいつか霰のようになられた。

それから雪の玉水を点々と許して、しんしんと寒さに親しんでいる。いまはうすまってゆく命に花のおもかげは重たすぎると。まぜあわせれば拒絶反応。若い短冊に老いさらばえた身をぬりこめて落花を読む。従三位(じゅさんみ)非参議の席がそらぞらしい。

めぐって仁治二年八月二日。

空はいたいたしく晴れふぶいている。

八十歳。

余生はかるい。

紅千鳥 = 梅の木 (初出・「孔雀船」12 1978・8)

増殖する、定家

ねこが
ねこが定家に
ねこが定家になびいている
大臣良経のひざから色目を使い
肩を草にしている
くると身をひるがえして
なだらかな
色っばい
愁波を詠む。
詠むと月が雲にじゃれつく。
みなぎる春の
ねこの言葉
ミャーオが皇子(みこ)なら
ミューミューは
皇子の孫のことか。
ねこが短冊に
短冊の上にねころがる。
ねこだから
ひきつって
言葉の遺体にすがってみやびに泣く。
月に泣く。

もう良経の体質は消えたころだ。
あとに残された
定家の上にくま
ひらがなを習いはじめる。
言葉は草の海だから
春に
爪をたてながら ミャーオ。
文字が鎌倉でキナ臭い匂いをたてはじめる。

(初出・「孔雀船」27 1985・1)

紙パック入り雪月花

《雪ゆきくれて修羅の段》

扁平な午後の修羅ゆきくれて
兄さんは淋しいのだよ。
岬へゆくな、岬へゆくな
主のいなくなった机の上で
ヒヤシンスがくだをまいている。
せろふぁんのような東風(こち)
盗っ人のように窓を侵蝕し頬に貼りついて。
嫁いだ妹の後姿がみえなくなったあたりで
夜店が
金魚の放蕩を嘆いていた
あの日から 兄さんは淋しいのだよ。
旗本退屈男が欠伸(あくび)をするように
新聞を広げると肌寒い地方が
たちのぼってくる。
凶か吉か
真っ赤なランドセルが妹に届いた日
胸の中ではぴゅうぴゅうびろろ
雪が鳴いていたっけ。

何もうたわない内に力尽きてはいけないよ
空にかかるかりそめの天の川
かりそめの親戚関係は多い
だからといって
咳こむな、咳こむな妹よ

空はいまから干潟になり
修羅しゅしゅしゅとゆきくれるから
雪見酒が体を透かしてゆき
胃のかたちに痛みをつくり
痛みの湖をつくり
さらに痛み止めをあおって
わけもなく兄さんは淋しいのだよ。

《買い物帰りの月に叢雲の段》

くさりと流人(るにん)
縄うたれ
春の底をさらう夢を見た。
部屋の隅で雪洞(ぼんぼり)が月の代役を務めている
母さんのところへ帰ろうよ
早く帰ろうよ子供が
心に縄を打つ。
父性愛をふりかざして
帰路についたが
その偽善ぶりにいやけさし。
ほぞをかむのは
月にむらくも
買い物籠を手にした
清少納言に別離の手紙を渡したのも
あの宵祭り。
いきなり泣いてみたり
人の悪口を
葡萄の種のように吐き出し
論語読みの論語知らず
になったのも。

子供の肖像を呑み込んで泣いている
大塚酒店のオヤジ
いまだ雪くれの私語を解かず
私語にからまった愛情を解かず
月にむらくもとはしゃらくさい
怒鳴りながら宵闇から
はらはらと はみ出していた。

それにくらべて私は

溺々と父性愛をふりかざすので
春の底をさらう流人の夢など見るのだと。
月にむらくもの袖で
清少納言とヨリを戻す前に
子供を寝かしつけておこうか。

《花をたばかるの段》

いつ誰がいったのか
ごく平凡な朝は
ごく平凡な、雪割り草や董の
小さな欠伸から始まるのだという。
確かに平凡であった
雑誌のように
ぺらぺらとめくれ
けだし三流レストランで
まずいほうれん草いために
食べなければ。
通りすがりの郵便配達人がいった。
「あなたへの手紙にはいつも花がいっぱいまっていますね」
職業はいったい何なのですかと聞かれ
ほかでもないさくらを美しくひきたたせるために
花のエスキスを集めているのですとは
いいかねた。
二月、三月、アン・ドゥ・トロワ
花がさきみだれるころ
決まってこの町は
郵便配達人の行き倒れがいて
つましい一家の窓をたばかる
一鉢いくらの魂が
パックに入って売られている。

(初出・「孔雀船」36 1990・7)

